

第一章 生命的基調

どの時代にもその時代を彩る時代の基調というものがある。古代には古代のそれ、中世には中世のそれ、近代にも近代のそれがあり、中世と近代の間に挟まれ、両者の時代色を色濃く宿したルネサンスにもそれはあった。そしてその色たるや、やはり独自の色調を帯びていた。

中世の、神の相の許に一心に神智を志向する世界に対しては、世俗的な人智を旨とする世界が、また自然科学が発達して物事の因果関係を重視する近代に対しては、類似や照応関係を主眼とみなすアナロジの世界が、ルネサンス期の特徴と言えよう。

この二つの中で、類似・照応的思考は本章でも多少触れ第三章で大きく扱う魔術の知の骨子である。また人智の方は第二章で取り上げる人文主義の一大特色であるが、その場合、少し先取りした言い方になるが、その人智を以てして真に人間を捉え切ったかどうかは疑問に思える。たとえば十五世紀後半のフィチーノの活躍した時代の人間哲学が、ありのままの生活感あふれる人間を描きえたか。人間は解釈したにせよ、それは人間的な人間はどこのVといった抽象化された理想像を解明したにすぎなかったのではなかったか。現実の人生身の人間はどこかに置き去りにされなかったか。

フィチーノやピッコの述べる人間とは、私たち食事をし排泄をする現実の人間とかけ離れていたと思われる。そこには理想的もしくは英雄的人間がいて、またそうした者の有する聖なる生命はあるが、生活臭に満ちた地べたを這ってでも生きていく雑草のような生命観は感じ取れない。仰ぎ見、夢想する対象としての生命はあるが、いっしょに汗だくになって生きていくこの手で触れうる生命はない。

ルネサンスの人間哲学がすべてこのようなものではもちろんないが、この傾向がわりと支配的である。

本章ではこれとはちがって、触感的で肉感度の高い人生身の人生身の人間像を提示して、概念的でない直接的な生命が脈打っていたことを示したい。

そうした生身の生命主義こそ、ルネサンス期の最も重要な基調なのである。まずその基調音がすでに中世末期に息づいていたことを明かしてみよう。

1 人生身を食う話の視座

十三世紀末に編まれた、作者・編者が不詳とされる、俗語(トスカナ語)による最初のノヴェッラ(短編物語)集『ノヴェッリーノ Novellino』の第六十二話は、いわゆる人生身を食う cuore mangiato話である。より正確に言えば、六十二話の前半部がそれに相当する。

このテーマの話は、後のボッカッチョ作『デカメロン』四日目第一話と第九話においても叙されていて、こちらの方が有名であろう。さらに、『クシーの城主とファイエルの貴婦人の話』と『トゥルバドゥール評伝』中のギョーム・ド・カペスタニーの「伝記」の二つも、このテーマを扱っている(後者の「伝記」を基にして『デカメロン』四日目第九話が書かれた)。

本書ではこれまであまり取り上げられてこなかった『ノヴェッリーノ』第六十二話を読み解いてみる。

肉体———心臓

まず第六十二話を試訳してみよう。

第六十二話 ロベルト殿の話がここに語られる。

アリミ・ニ山はブルコ・ニユにある。ロベルト伯爵と呼ばれる領主がいて広大な領地を有していた。伯爵夫人と侍女がいて、頭の弱い門番がいた。

門番は体格が良く、名をバリガンテと叫んだ。侍女の一人が門番と寝た。その侍女は別の侍女にも勧め、ついに夫人にまで噂が届いた。門番の一物が大きいと夫人は耳にして、彼と寝た。

ロベルト殿がそれを嗅ぎつけた。伯爵は門番を殺すよう部下に命じた。門番の心臓でパイを作って夫人と侍女にご馳走した。三人はパイをたいらげた。

食後、伯爵が尋ねた。

「パイの味はどうだったかね」

「おいしゅうございました」と三人ともが応えた。

そこで伯爵が言った。

「生きていたときのバリガンテも気に入っていたのだから、死んでしまったバリガンテのことも好きなのだ。これはあたりまえだ」

夫人と侍女たちは事の真相を理解すると、わが身を恥じ、世間に顔向けできないと思った。修道院を建てて、アリミ・ニ山女子修道院と名づけた。彼女たちは修道女となったのである。

その修道院は急速に発展を遂げて豊かになった。以下のような話が伝えられている。

立派な衣装や武器を身に着けた優男が通りかかると、修道院に招待されて厚くもてなされた。院長と修道女が男と会って話をし、男の気に入ったひとりが接待をした。ご馳走をしてベッドをとにした。

朝、男が起きると、水と手ぬぐいがおいてある。顔を洗うと、女が針と絹糸を用意しており、男がボタンをはめようとしたとき、男に針に糸を通させた。

三度やってみてもうまくいかない、持ち物は全部取り上げられ、何も返ってこなかった。しかし三度目で穴に通ると、武具などの所持品が戻され、宝石ももらえた。

話の筋をまとめてみる——夫が妻の姦通を知って姦通相手の男を殺し、その心臓をパイにして妻に食べさせる。妻は食べ終えてからその事実を知らされてわが身を恥じ出家する。そして修道院を建てて売春まがいのことをして修道院を発展させる——。このうち、出家するまでが「心臓を食う話」である。これは姦通物語であること是一目瞭然であるが、姦通恋愛物語かというところには首肯できかねる。恋愛的部分、つまり愛の希求といった情熱的な描写が一片もみられず、「門番の一物が大きいと夫人は耳にして、彼と寝た」という、きわめて即物的な要素が平然と語られているからである。精神性は皆無であり、肉面だけが語られている。また中世の恋愛文学の特徴である、若い騎士（男）から既婚夫人（女）への愛という形を取らず、女性から積極的に、それも身分の卑しい男性への性欲という形態で綴られている。

騎士から既婚夫人の愛も、結婚制度という制約を乗り越えてはじめて成就される愛こそが主體的な愛であるという発想があり、愛の達成よりも過程に重きが置かれるのは言うまでもないが、最終的には憧憬の対象である女性との肉体的合一を第一義としている。

この点第六十二話はその目標を、それも女から男へという流れの中で、あっさりとして遂げてしまっている。「一物が大い」という最も原初的で実感的、つまり生身に根ざした理由が率直に挙げられている。要するに身体からはじまっている。相手を肉体を持つ存在として見定めて、それを受け容れている。愛に天上的愛と地上的愛があるとするならば、第六十二話はまさに地上的愛、肉体の満足を求める愛である。

従ってこの線に則って肉体の一部たる心臓が、殺された門番から取られてパイにされるわけである。もちろんのことだが、心臓は人体の中で最も重要な臓器であり、「生命の座」とされている。と同時に、心臓は心でもあ

り、精神的な象徴性も帯びている。

ロマ、ノ・ガールディニの言葉を引こう。「精神が血の近くに達し、——感覚を失わずに——身体の、感じやすく活力にあふれた発熱をうながす限り、『心臓』は精神なのである。心臓は、血液によって熱く感じやすくなったが、同時に、明晰な直感、明瞭な形姿、正確な判断となる精神なのである。心臓は愛の器官である」。

心臓が愛の器官だとするならば、夫人は門番の愛を咀嚼して味わったことになり、愛を本来的な意味で受容したわけである。これはグロテスクな内容だが、肉体に出発点をもった第六十二話の流れからすれば当然の帰結である。それとともに、夫の嫉妬の凄まじさも見て取れる。格気を通り越して憎しみにまで至っている。肉体には肉體を以て復讐したのである。凄絶な感情のやりとりがここには確かに存在する。

羞恥——名誉

これに対して夫人と侍女たちは、「わが身を恥じ *si vergognato*、世間に顔向けできないと思つて」修道女になる。

ここで大切なのは「わが身を恥じ」たことである。これは姦通を恥としたのか心臓のバイを食べたのを恥としたのか、あるいは両者ともに恥としたのか判然としないが、とにかく恥とされていることで、こうした一連の事実には罪意識を感じて出家したのではない、ということである。いったい姦通に対して罪意識を抱かなかったのであるか。つまり、夫人も侍女も、原罪意識をその宗教性の根本とするキリスト教徒ではないのか、ということである。キリスト教の教えが西欧中世文化の基調にあると言われるが、伯爵夫人という身分の高い女性に教えは浸透していなかったであろうか。

仮りに中世に恥の文化があったとしよう。だとすれば次のような理由が挙げられるであろう。

- (1) 教会の教えが充分に浸透していなかったこと。
- (2) 人間関係にいきいきした感情の行き来があったこと。
- (3) 人間関係の相互性がきちんと保たれていた、つまり絆がしっかりしていたこと。
- (4) 人間関係を規定する倫理的価値がゆるやかで自由であったこと。

四点をまとめると、キリスト教会による倫理的統制がまだ広まっていなかった農村社会や騎士社会が場面として見えてくる。つまりこの二つと異質な都市社会ではない、ということ、翻って教会組織が整って教えも流布している都市社会こそが罪の文化の母体となった場ではなかったか。第六十二話の世界はまだ都市社会ではなかった。人間と人間が生の感情をぶつけ合えた共同体であった。

夫人たちは罪の意識は持たず、己の行為を恥とする。そしてこの恥のせいで「世間に顔向けできない」のであるが、これは原文では *bellie avevano perduto l'onore del mondo* であり、直訳すると「世間に対する名誉を失う」ことである。これは原文で「世間に対する名誉を失う」ということである。恥とは「世間に対する名誉を失う」ことであり、恥の反対語が名誉であることが理解できよう（いま *il mondo* を「世間」と訳したが、「世界」とか「社会」とかいう訳語は不適切で、ここでは騎士社会という同種集団の枠である世間の意味と解釈すべきであろう）。夫人にとって恥を雪ぐとは名誉の回復を意味する。裏を返せば、夫人は名誉を感じてそれまで生活してきたわけで、夫から愛人の心臓を食べさせられたことで公然と名誉を剥ぎ取られたのである。公に恥をかかされなければ、ひょっとしたら名誉をそのまま保ちつづけ、平然と暮らしていったかもしれない。

要するに、当時の騎士階級とその夫人たちは名誉を生きがいとし、それが公然と辱められるのを恥とした。

その夫人の名誉回復の方法は俗世間を去って聖界に入ること、つまり修道女になることであった。しかしこの修道院は売春行為によって富を得て豊かになっていく。キリスト教の倫理的教えはいぜんとして浸透しておらず、肉体を基とした生活がつづけられていく。また浸透していたにせよ、こうした行為がごく普通に行なわれていたという実態を作者は示して皮肉っているのかもしれない。専売、一部の貧しい女たちの生きる道のひとつとして

売春は中世でもルネサンスでも存在した。中世では黙認され、ルネサンス期では許容の上、制度化もされた。高級な娼婦も出現して、詩作や音楽に秀でた才能を開花させた例もある¹⁰⁾。

生身の文化

いずれにせよ第六十二話は精神よりも身体の優位を、罪でなく恥の文化を教示してくれた。一般的にキリスト教的的精神世界一色とみなされがちな西欧中世社会の中にも、こうした身体を出発点とする人間的感情の豊かな文化があったのである。これは世俗の文化であり、散文で語られるのが妥当であろう。間近に迫っているルネサンス文化の世俗性と相通するものが見える。これこそ地に足のついた「生身の文化」なのである。

そして、この生身の基調音がポッカッチョ『デカメロン』で肉欲の肯定として花開く。

2 肉欲の肯定

女色

第Ⅱ章で触れるが、『デカメロン』では機知を隠れたテーマにした物語が多い。ここで取り上げる二話は、その中でも異色の部類に属するものである。というものの主人公が修道士と貴婦人だからであり、扱うテーマも女色に関するものなのである。

若い修道士を主人公とする一日目第四話は「こんな話である。

ルニジャーニという村にある修道院に、「断食や不寝番をいくらしてみても、薔薇色の肌と身体のなかの力を潰すことができない若い修道士がいて、ある日、他の修道士が眠っている屋さがりに、教会堂の人里離れた寂しい場所で、「一人の大そう美しい娘を見かけた」。激しい欲情にかられた修道士は娘に近づき、くどきおとして自分の小部屋に連れこむことに成功する。そして二人で快楽にふけるのだが、そのとき眠りからさめた修道院長が小部屋の前を通りかかって物音に気づく。と同時に修道士の方も誰かの足音に動づき、「小さな穴から覗いてみますと、まぎれもなく僧院長の聞き耳をたてている姿が見える。それで覚悟をきめて「ただちに智恵をふりしぼって、何らかの有効な策を探そうと努め」る。

修道士は表へと出て、小部屋の鍵をしっかりと閉めるや院長の部屋へ行き、外出のときの慣例に従って院長に鍵を差し出し、薪を運ばせるために森へ行つてくると嘘をつく。院長は「若者の過ちをもっと詳しく知りたいと思っていましたので、自分に見られたとは露知らぬような相手の素振りに、これ幸いとして、むしろ喜んで相手の鍵を受け取るや、素知らぬ顔で彼に外出の許可を与え」る。

院長は修道士が立ち去ったあと、足音を忍ばせて小部屋に行き娘を見て、それが美しくうら若い乙女であるのを見てとるや、老齢にも拘らず激しい情欲の湧いてくるのを感じて、思わず次のように呟いてしまう。

ああ、不満やら不快ならばいくらでも身边に用意されているこの世にあって、喜びが手に入れられるときに、なぜわたしはそれに手をつけようとしなのかい？ これは美しい娘だ。彼女がここにいることなど、この世の誰も知りはない。わたしの喜びをこの娘の身に与えることができるというのに、なぜそうしてはいけないのか、わたしにはわからない。誰に知られるというのだ？ 誰にも知られはしないだろう。そして人に知られぬ罪は、半ば赦された罪なのだ。これほどの機会はまず二度とめぐってこないだろう。神さまがお恵みをくださるときに、その喜びを手に入れるのは賢いわざだ。わたしもそう考えている。

引用文中の傍点は私が打ったものだが、この都合のよいあっけらかんとした機転は実に見事である。

こうして院長は自己弁解して娘と快楽にふける。ポッカッチョはこの行為に対して何ら批判めいたことは書か